

〈解題〉

本稿は、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）の論文“Ueber den Geschlechtsunterschied und dessen Einfluss auf die organische Natur“の全訳である。原著は、シラー（Friedrich von Schiller, 1759-1805）が1794年夏に創刊した雑誌『ホーレン』（Horen）の第2巻（Horen, 1795 2, S.99-132）に掲載されたのが初出である。フンボルトは『ホーレン』の編集委員会に迎えられた後、シラーの薦めもあって、当初行っていた人間の性格についての研究を、とりあえず性についてあるいは女性について二つの論文として完結させようとした。その第一論文がここに訳出した「性差およびその有機的自然に及ぼす影響について」であり、1795年正月に完成させた後、引き続いて第二論文「男性の形式と女性の形式について」（Ueber die männliche und weibliche Form）を同年3月に脱稿し、『ホーレン』の第3巻（Horen, 3, S.80-103）および第4巻（Horen, 4, S.14-40）に掲載された。第一論文、第二論文ともに、プロイセン王立科学アカデミー版全集第1巻（1903,1968）に収められている（GS, I, S.311-334, 335-369）。

なお上記二論文と内容的に密接な関係があるフンボルトの三つ目の性差論を含む論文として、アカデミー版全集第1巻に収められている「比較人類学草案」（Plan einer vergleichenden Anthropologie）（GS, I, S.377-410）の第8節「比較人類学の思想の基調になっているもっとも重要な事実」（Hauptsächlichste Thatsache, auf welche der Gedanke einer vergleichenden Anthropologie sich vorzüglich stützt, GS, I, S.400-410）がある。この「草案」は、上記二論文の執筆刊行の後、1795年に書かれた手稿で、1903年の著作集（Wilhelm von Humboldts Werke）に編者のライツマン（Albert Leitzmann）によって初めて掲載公刊された。ちなみに「草案」の邦訳として、柘田啓三郎訳「比較人間学の計画（1795）」（池島重信・柘田啓三郎訳『人間学とは何か』鐵塔書院、1931年、1-54頁所収）、クラウス・ルーメル・小笠原道雄・江島正子訳「比較人類学草案」（C.メンツェ編『W.v.フンボルト 人間形成と言語』以文社、1989年、54-90頁所収）がある。

19世紀以後の新しい社会の形成と性規範の再編成がどのように相即的に遂行されたかを検証しようとする際に、フンボルトの2編の性差に関する論文は、カント、フィヒテ、ヘーゲル、フリードリヒ・シュレーゲルさらにはシュライエルマッハー、ショーペンハウアー等のテキストと並んで、18世紀末から19世紀初めにかけてのドイツにおける性差をめぐる議論の文脈を知る上で不可欠の原典としての価値を有している。まず第一論文をここに訳出した。

本訳稿の訳出に際しては、アカデミー版全集第1巻（Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften（Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften）Band I. Erste Abteilung: Werke I. Berlin B. Behr's Verlag, 1903, Photomechanischer Nachdruck, Walter de Gruyter & Co. Berlin, 1968, S.311-334）を底本とした。

なお原文で隔字体で強調されている部分は、訳出に際しては傍点を付した。テキストを理解する上で重要なキーワードには訳語のあとに（ ）を付して原語を示した。[] は訳者による訳の補いである。

（すぎた・たかお／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授）